

「教育サービス面における社会貢献」評価報告書

(平成12年度着手 全学テーマ別評価)

和歌山大学

平成14年3月

大学評価・学位授与機構

大学評価・学位授与機構が行う大学評価

大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

1 評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は、大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その教育研究活動等の改善に役立てるとともに、評価結果を社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の諸活動について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

2 評価の区分

機構の実施する評価は、平成 14 年度中の着手までを段階的実施(試行)期間としており、今回報告する平成 12 年度着手分については、以下の 3 区分で、記載のテーマ及び分野で実施した。

全学テーマ別評価（「教育サービス面における社会貢献」）

分野別教育評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

分野別研究評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

3 目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、当該大学等の設定した目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的な目的及び目標が設定されることを前提とした。

全学テーマ別評価「教育サービス面における社会貢献」について

1 評価の対象

本テーマでは、大学等が行っている教育面での社会貢献活動のうち、正規の課程に在籍する学生以外の者に対する教育活動及び学習機会の提供について、全機関的組織で行われている活動及び全機関的な方針の下に学部やその他の部局で行われている活動を対象とした。

対象機関は、設置者（文部科学省）から要請のあった、国立大学（政策研究大学院大学及び短期大学を除く 98 大学）及び大学共同利用機関（総合地球環境学研究所を除く 14 機関）とした。

各大学等における本テーマに関する活動の「とらえ方」、「目的及び目標」及び「具体的な取組の現状」については、「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」に掲げている。

2 評価の内容・方法

評価は、大学等の現在の活動状況について、過去 5 年間の状況の分析を通じて、次の 3 項目の項目別評価によ

り実施した。

- 1) 目的及び目標を達成するための取組
- 2) 目的及び目標の達成状況
- 3) 改善のためのシステム

3 評価のプロセス

大学等においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。

機構においては、専門委員会の下に、専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い、その結果を専門委員会に取りまとめた上、大学評価委員会で評価結果を決定した。

機構は、評価結果に対する意見の申立ての機会を設け、申立てがあった大学等について、大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

4 本報告書の内容

「対象機関の現況」及び「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」は、当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

「評価結果」は、評価項目ごとに、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

また、「貢献（達成又は機能）の状況（水準）」として、以下の 4 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いている。

- ・ 十分に貢献（達成又は機能）している。
- ・ おおむね貢献（達成又は機能）しているが、改善の余地もある。
- ・ ある程度貢献（達成又は機能）しているが、改善の必要がある。
- ・ 貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり）、大幅な改善の必要がある。

なお、これらの水準は、当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり、相対比較することは意味を持たない。

また、総合的評価については、各評価項目を通じた事柄や全体を見たときに指摘できる事柄について評価を行うこととしていたが、この評価に該当する事柄が得られなかったため、総合的評価としての記述は行わないこととした。

「評価結果の概要」は、評価結果を要約して示している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について、その内容とそれへの対応を示している。

5 本報告書の公表

本報告書は、大学等及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

対象機関の現況

機関名及び所在地

和歌山大学
〒640 - 8510 和歌山県和歌山市栄谷 930 番地

和歌山大学は、旧制和歌山師範学校と旧制和歌山高等商業学校を前身として、昭和 24 年、学芸学部（昭和 41 年教育学部に名称変更）と経済学部の 2 学部からなる新制大学として発足した。

昭和 62 年、現在の栄谷キャンパスに移転統合し、平成 7 年 10 月、情報通信システム学科、光メカトロニクス学科、精密物質学科、環境システム学科、デザイン情報学科の 5 学科からなるシステム工学部を創設した。

システム工学部の創設に伴い、既存の 2 学部についても社会のニーズに応えるため教育研究組織の見直しを行い、教育学部は、学校教育教員養成課程、国際文化課程、自然環境教育課程、生涯学習課程の 4 課程に改組した。経済学部においては、経済短期大学部を発展的に解消して夜間主コースを設置した後、経済学科、ビジネスマネジメント学科、市場環境学科の 3 学科に改組した。また、教育学部には平成 9 年 4 月に特殊教育特別専攻科が設置されている。さらに高度の教育研究を行うために大学院教育学研究科 経済学研究科及びシステム工学研究科(いずれも修士課程)が設置されている。

学内共同教育研究施設としてシステム情報学センター 生涯学習教育研究センター 地域共同研究センター及び保健管理センターが設置されている。

和歌山大学システム情報学センターは、情報専門教育、学術情報処理等を通して、高度な情報教育・研究を支援するために、平成 9 年 4 月に設置された。既設の情報処理センターを改組充実したものであり、演習用コンピュータを始め、学生ベンチャーを支援するインキュベータ室等を備えている。

和歌山大学生涯学習教育研究センターは、生涯学習社会における大学の役割を果たすため生涯教育・生涯学習の在り方を研究し教育に取り組む組織として、平成 10 年 4 月に設置された。同時に大学に集積された学問的蓄積を、地域や市民に応える内容でコーディネートし、公開講座等を提供する事業体でもある。

和歌山大学地域共同研究センターは、和歌山大学が「地域に開かれた大学」として、民間機関、地方公共団体等との共同研究や受託研究等、地域社会と大学との連携・協力を推進する機関として、平成 11 年 4 月に設置された。また、教育学部には学部附属施設として教育実践総合センターが設置され、実践的教育研究体制が充実した。さらにこれら省令施設に加えて、大学内措置として紀州経済史文化史研究所、学生自主創造科学センター、また、経済学部には経済研究所、経済計測研究所があり、いずれも教育研究内容を充実させるとともに独自の研究活動を行っている。

学生総数、教員総数(現員)は、以下のとおりである。

学生総数 4,463 名			平成 13 年 4 月 13 日現在		
学 部		計	大 学 院		
学 部 名	学生数		研究科名	学生数	計
教育学部	954	4,017	教育学研究科	79	434
経済学部	1,753		経済学研究科	69	
システム工学部	1,310		システム工学研究科	286	
専 攻 科					
特殊教育特別専攻科					
発達障害教育専攻	12	12			

教員総数(現員) 371 名		平成 13 年 4 月 13 日現在	
区 分	学 長	教 員	計
学 長	1		
教育学部		108	(教育実践総合センターを含む)
附属学校		77	
経済学部		83	
システム工学部		94	
システム情報学センター		3	
生涯学習教育研究センター		2	
地域共同研究センター		1	
保健管理センター		2	
計	1	370	371

教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

1. 教育サービス面における社会貢献に関する考え方

1. とらえ方と位置付け

本学は、和歌山県に立地する唯一の国立大学であり、地域の知的中心としての役割を担っている。特に和歌山県は、急速に高齢化が進んでおり、過疎化の著しい地域もある。主な産業も製造業を中心とする伝統的なものが多く、産業構造の転換も必要とされている。こうした地域の活性化を促進するためには、若者にとって魅力ある職場作りや生涯を通して知的欲求を満たすことのできる教育研究環境の提供が求められている。それには日常的な疑問から高度な研究レベルに至るまで、大学に行けば直ちに問題解決できないまでも解決の糸口が得られるなど、身近で開かれた大学、地域から信頼される大学を実現する必要がある。その一環として、教育サービス面における社会貢献は、生涯学習機会の提供を通して必要に応じて社会と大学を往復する教育研究システムの中核課題と位置付けられる。

2. 社会サービス活動の内容

大学で何を学び、役立てるのか、単なるキャリアの獲得ではなく、学生自身が一生涯の生活設計など明確な目的を持つことが重要である。それには大学ではどのような教育研究が行われているのか、地域社会に広く情報を開示し理解を得る必要がある。また、一方向の知識の伝達ではなく、地域社会のニーズを汲み取りつつ、多様なニーズに応えることのできる取り組みが必要となる。このうち正規の課程に在籍する学生以外の市民に対する教育サービスとして、本学教職員や大学施設等を基盤に、生涯学習機会の提供の一環として、さらに地域社会のシンクタンクとして、次のような活動を行っている。

(1) 癒しの教育:

生涯教育として幼少期から親と子がともに汗を流し、生き物を育て慈しむなど癒しの教育が求められている。これには例えば「土とのふれあい」など教育学部附属農場・附属教育実践総合センターが提供する親子体験教室が役立つ。さらに高校等での大学教員による模擬授業(出前授業)は、青年前期の若者に対して知的関心や学問探究への意欲を高めることができる。

(2) 社会人のキャリアアップ:

社会人等を対象とした科目等履修生制度はパートタイムの学習機会を充実させることができ、研究生制度は、企業等の研究者や社会人に陳腐化した知識のリニューアルや先端的な研究成果を提供することができる。また教

育訓練給付制度による職業訓練講座は資格取得や社会人のキャリアアップに加えて厳しい経済環境の中で雇用促進に寄与すると期待されている。

(3) 市民の知的ニーズに応えるサービス:

高学歴社会にあって第一線を退いた後も市民の知的欲求は強い。こうしたニーズに応えるには科目等履修生制度はもちろんのこと大学が主体となって運営する公開講座・シンポジウム・セミナー・マスメディアへの情報提供等を通しての最新の研究成果の解説と知識の教授は不可欠である。これらの取り組みは交通至便の市街地で開催することが効果的であり本学では市街地に独立施設を持つ生涯学習教育研究センターが中心となって、定期・定時の土曜講座や健康スポーツ講座等を開設している。

(4) 社会ニーズに応えるサービス:

登校拒否や学級崩壊など学校教育現場は多くの問題を抱えている。民間企業等においても、技術開発や製品開発には個別要素技術では対応の難しい問題が内在している。こうした個々の組織では解決の難しい課題と取り組むには、分野横断的に多様な人材を有する大学の果たす役割は大きい。社会ニーズの高い課題について単に一方的に情報提供を行うのではなく、問題を抱えた地域の研究者や実務者と専門的知識を持つ大学教員がプロジェクトを組み、異分野交流を図りつつ問題解決に当ることが必要である。高邁な理論に終始するのではなく、常に社会と接点を持ち、地域社会に根をおろした着実な取り組みが必要である。本学では教育学部附属教育実践総合センターが学級崩壊や少年犯罪をテーマに現職教員が参加する研究プロジェクトや共同学習の機会を提供している。また、地域共同研究センターでは、高度技術習得のための技術研修や自治体職員への出前研修などを実践している。

(5) 地域情報ネットワークへの貢献:

情報化社会にあって、IT 技術の習得と利用について市民の関心は高い。この知的欲求に応えるため、キーボードの操作に始まる初心者向けのパソコン講習会を開催している。さらにシステム情報学センターでは、和歌山地域の情報化・ネットワーク化や在宅学習に利用できる情報ベースの作成を進めるなど、地域の情報センターとしての役割を果たしている。

(6) 附属図書館の開放:

情報化・ネットワーク化と並行して、大学が推進する地域・生涯学習への支援事業として、附属図書館の管理する資料・施設を開放・提供している。なかでも地域により密着した支援体制を確立するため、館外カウンターを大学外(市街地)に設け、貸出図書配送サービスを行っている。

2. 教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

1. 目的

大学教育のユニバーサル化・大衆化が進むにつれて、市民の学習ニーズが高度化・専門化している。正規の課程での大学教育に加え、大学教育を受けなかった市民への大学教育機会の提供、大学卒業後に陳腐化した知識のリニューアルや研究成果のまとめ、各種資格の取得やキャリアアップなど、社会人に対するパートタイムの学習機会の提供が求められている。こうした社会ニーズに応えるには、社会人の多様な入学目的にあったカリキュラムを提供するなど、必要に応じて大学と社会を往き来する往復型の教育研究システムが必要となる。

さらに生涯学習社会の実現には、青少年期に生涯学習の基礎となる能力を身につけ、学習する意欲を培うことが前提となる。それには大学の持つ教育研究機能や人的資源の活用が期待されるが、何より、大学にはどのような人材がいて、どのような教育研究を行っているのか、大学の地域開放が不可欠である。大学教員が現場に出向き、講演や模擬授業を行う、地域住民とともに活動したり、大学の教育現場を開放して体験学習機会を設けるなど、日常的な実践が役立つと考える。

いずれの活動も、地域の知的中心としての役割が大学に期待されている。ところが地域社会が求めるのは、単なる新しい知識や技術の伝達に留まらず、地域社会の抱える様々な問題の解決であって、それには現場の実務者や市民と大学教員が同じ目線で問題を捉え、解決するプロジェクトなど、取り組みの場を提供する必要がある。荒廃著しい教育現場や中小企業など地場産業の活性化が典型である。これらの社会ニーズを汲み取りつつ、機敏に対応できる柔軟な組織と地域のシンクタンクとしての役割が大学に求められている。

こうした社会ニーズに的確に応えるため、正規の課程に在籍する学生以外の市民を対象に、本学は、

- (1) 社会人のキャリアアップ
- (2) 開かれた大学
- (3) 地域社会との連携

を目的に、地域に立地する大学を中心とした生涯学習社会形成のため、多様な学習機会の提供を行っている。

2. 目標

本学では、学内共同教育研究施設と附属図書館が地域社会との接点となり、学部・研究科の教育研究機能や人的資源及び学術情報資料を活用して、正規の課程に在籍する学生以外の市民を対象に多様な生涯学習機会を提供している。先に述べた目的を達成するため、項目別に次のような目標を設定して活動している。

- (1) 社会人のキャリアアップ
- (a) 科目等履修生制度

大学を卒業していない市民への大学教育機会の提供と学位取得支援、教員免許等各種資格取得に必要な科目履修・単位補完など、社会人のキャリアアップ支援を目標とする。

(b) 研究生制度

企業等の研究者や社会人が持つ課題について最新の研究成果を教授し、必要とされる研究方針や研究動向を調査研究するとともに、問題解決支援を行うことを目標とする。

(c) 社会人のリカレント教育（教育訓練給付制度）

厚生労働省の「雇用の安定及び就職の促進を図るために必要な職業訓練制度」の趣旨を踏まえ、経済環境の厳しい状況において、社会人の雇用促進を目標とする。

(2) 開かれた大学

(a) オープンキャンパス

開かれた大学として、毎年8月に全学部で大学を開放し、大学の教育内容や研究資源を紹介している。市民の大学への理解と関心を集めることを目標としている。

(b) 自主研究コンクールの開催

自主的に発想し創造性豊かな人材育成を目標に、和歌山県下の高校・高専・大学に在籍する学生を対象として自主研究コンクールを開催している。

(c) 体験学習（親子体験学習など）

次代を担う子供たちが命や環境の大切さを学べるよう、豊かな自然体験や社会体験の機会提供を目標としている。

(d) 公開講座・講習会等の開催

大学の教育資源を広く市民に開放し教員の研究成果を社会に還元するとともに、市民の高度で専門的なニーズに応えることを目標としている。初歩的なパソコン講習会を始めとして、高度な機器操作技術の習得、先端的な研究動向や研究成果の解説、小中高の現職教員の資質向上を目標とした教員の再教育など、内容は多岐にわたる。特に生涯学習教育研究センターでは市街地に位置する利便性を活用して、高校生から専門家まで広く市民を対象に「土曜講座」や「生涯スポーツ講座」など定期・定時の講座を開設している。

紀州経済史文化史研究所においては、所蔵の古文書・絵図・考古学資料等、和歌山地域に関連の深い史資料を広く一般に公開し、定期的に「展示」を行っている。

(3) 地域社会との連携

地域社会に立地する大学として、地域社会への貢献と連携は、重要な建学目標の一つである。この地域社会との連携のうち、教育サービスに関連する活動を以下に記している。

(a) 出前授業

青年前期に学ぶことの重要性和熱意を喚起することを目標に、大学教員が高校等に出向き、大学の模擬授業（出前授業）を実施している。

(b) 出前研修

社会人の各種資格取得支援や職場環境の改善などを目標に、学校図書館司書教諭講習、社会教育主事講習、教

育職員専修免許認定講習，県主催の IT 講習会及び教育職員免許法認定講習の講師に教員を派遣しているほか，自治体職員の資質向上を目標に自治体職員研修にも取り組んでいる。

(c) 館外カウンターの開設

地域図書館の中核を担う本学附属図書館は，市民の図書館利用機会の拡大と利便性向上を目標に，夜間・土曜日も開館するとともに，大学外に「館外カウンター」を設け，貸出図書の配送サービスを行っている。

(d) 施設の提供

各種検定試験・採用試験への会場提供，スポーツ大会への体育施設の開放をしている。

3. 教育サービス面における社会貢献に関する取組の現状

本学に備わっている多様な教育研究資源を活用して，社会ニーズを汲み取りつつ一般市民への多様な学習機会を提供している。教育サービス面の社会貢献を，必要に応じて大学と社会を往復する教育システムを(1)社会人のキャリアアップ，(2)開かれた大学，(3)地域社会との連携，に分類して整理したが，これらについての取り組みの現状は以下のとおりである。

(1) 社会人のキャリアアップ

(a) 科目等履修生制度と研究生制度

生活レベルの高度化とともに，一生涯を通じた市民の知的ニーズが高まっている。大学卒業後に陳腐化した知識のリニューアルや獲得した知識のとりまとめなど，必要な時期に，必要な大学教育を受ける機会提供が求められている。さらに大学を卒業していない市民の学位取得を支援するシステムも必要であり，こうした知的ニーズに応えるため，3 学部で科目等履修生制度や研究生制度を設けている。

(b) 社会人のリカレント教育（教育訓練給付制度）

経済環境の厳しい状況にあって，キャリアアップや各種資格取得は，社会人の雇用促進に必須の取り組みである。こうした視点から，厚生労働省の「雇用の安定及び就職の促進を図るために必要な職業訓練制度」の趣旨を踏まえ，経済学部「実務商学」，システム工学部に「システム工学部設計情報処理コース」の職業訓練講座を設けている（厚生労働省の講座指定済み）。また，教育学部においても，教育現場での「いじめ」，「不登校」などの今日的問題に対する知識及び実践力を養うことを目的として，平成 14 年度に向け，修士課程（教育学研究科学校教育専攻）に「発達支援教育専修」を新設し，現職教員を対象とした学部リカレント政策の一環として位置付け，現在，概算要求中である。

(2) 開かれた大学

(a) オープンキャンパス

本学ではどのような教育研究を実施しているのかについて，毎年 8 月にオープンキャンパスを実施し，3 学部の教育研究内容の紹介を行っている。特に小中高生など年少の参加者が教員と協働してマルチメディア通信の実演や全方位視覚センサ体験，二ホンオオカミの剥製展示など，最先端の研究機器や研究資料に触れる体験学習を実施し，科学の仕組みやモノ作りのおもしろさを通して，自主性や創造性を啓発している。

(b) 自主研究コンクールの開催

地域産業界の協力を得て，和歌山県下の高校・高専・大学生を対象とした学生自主研究プロジェクトコンクールを主催し，優秀な個人やグループを表彰する活動も行っている。こうした全学を挙げての取り組みは，自ら課題探求し問題解決する能力の養成を目指した学内組織の学生自主創造科学センターの設立（平成 13 年 4 月）へと発展している。

(c) 体験学習（親子体験学習など）

自然を慈しむ幼児期の体験は，その後の人間形成に重要な役割を果たしている。こうした癒し教育の視点から，教育学部附属農場を利用して「土とのふれあい，親子体験教室」を開設している。この取り組みは，自然と触れ合い，命の大切さを体験学習する「日本自然環境学習センター」構想を実現するための「公的共同研究会」設置（平成 13 年 7 月設立）に引き継がれていることは特筆すべき成果である。これは本学が知的支援を行い，和歌山市内の未利用地を有効活用した自然体験農園や資源リサイクルシステムを基礎に，小学生を中心とした自然体験総合教育を目的としている。

(d) 公開講座・講習会等の開催

本学の研究成果を積極的に公表し，また，地域社会の知的ニーズに応えるため，教育学部，経済学部や生涯学習教育研究センターが中心となって公開講座を開設している。毎年度，和歌山地域固有の課題や社会ニーズの高い課題を選定し，地域社会の知的ニーズに応えている。中でも生涯学習教育研究センターでは，特集的テーマやセミナーではなく，毎土曜日開講の土曜講座や生涯スポーツ講座など，高校生でも理解でき専門家でも興味を持つ定期・定時の講座を開設しているところに特徴がある。毎回，固定層を獲得し和歌山県下全域にラジオ放送されるなど，報道機関とも連携した市民に親しまれている講座である。土曜日開設の教育サービスとして，障害児児童の教育指導も特筆すべき取り組みとして掲げたい。教育学部の教員や大学院生が附属養護学校児童・地域養護学校児童と保護者とともに自然を慈しみ育てる自主的な課外活動である。

教員養成学部を持つ大学として「不登校」や「学級崩壊」など荒廃した教育現場の改善にも取り組んでいる。教育学部附属教育実践総合センターでは，教育臨床・学校教育相談研究プロジェクト等の中で公開講座やセミナーを企画し，和歌山県内の教育委員会担当者や現職教員の資質向上に大きく貢献している。

高度に情報化した社会では，インターネットを利用し

たサイバーテロなどコンピュータ犯罪が後を絶たない。こうした情報犯罪防止のために特徴ある取り組みとして、システム工学部は和歌山県警察本部と協働して、毎年度「コンピュータ犯罪に関する白浜シンポジウム」を開催している。経済学部では学内施設を活用して、学外者向けにパソコン講習会を実施している。紀州経済史文化史研究所では古文書や資料類の歴史的価値の認識と保存、活用への積極的な関心を喚起するため、古文書・絵図・考古学的資料群を毎年、附属図書館で「展示」を行っている。

(3) 地域社会との連携

(a) 出前授業

大学で何を学び、どのような付加価値をつけるのか、また、正しい職業観を持つためにも生涯学習テーマの一つとして、高校 - 大学の教育連携が取り上げられている。本学では、これまでも3学部で高校からの要望に応じて出前授業を実施してきた。この高大連携をさらに発展させて、本学と和歌山県教育委員会が協定を結び、県立高校全てを対象として高校生が本学で開設している授業や公開講座に参加する教育事業を平成13年10月より実施することになった。大学と特定の高校との連携ではなく、より多くの高校生に大学教育を受講する機会提供を目指した全国に先駆けた取り組みである。

また、地域社会との連携の一つとして、教育学部では平成13年度から附属学校評議員制度を導入した。この取り組みにより、附属学校と地域社会との教育における連携強化が図れると期待されている。

(b) 出前研修

社会人に対する出前研修も実施している。教育学部では、学校図書館司書教諭講習、教育職員専修免許認定講習を開催するとともに、和歌山県教育委員会主催の教育職員免許法認定講習に講師を派遣している。生涯学習教育研究センターでは、社会教育主事講習を開催しており、また、地域共同研究センターでは本学教員に加えて多様な客員教員の教育研究資源を活用して、地域の活性化を担う自治体職員に対して、企画力・問題対応力・調整力を養成するための自治体研修を和歌山県下の自治体で開催している。こうした自治体研修に加えて、民間企業や各種団体のニーズを汲み取り、分野ごとに高度な機器操作や先端技術を習得するための研修やセミナーを開催している。

(c) 館外カウンターの開設

公開講座やセミナーなどとともに、市民の学習ニーズを満たす附属図書館の資料・施設の開放は、生涯学習機会提供に欠かせない取り組みである。本学では、夜間・土曜日も開館し、図書館の利用機会の拡大を図っている。さらに必要な情報を検索できる「蔵書の目録・所在情報(OPAC)」を公開するとともに、大学に行かなくても図書館が利用できる館外カウンターを市街地に開設して貸出図書の配送サービスを実施するなど、市民の知的ニーズに応えている。また、本学附属図書館は、和歌山地域の図書館との連携を図るため大学図書館はもとよ

り、公共の県立図書館をも含む「和歌山地域図書館協議会」を立ち上げ、その中枢を担い、個々の図書館から横の広がりを持ったバーチャルな「和歌山地域コンソーシアム図書館」をウェブ上に開設する新しい地域図書館の実現に邁進している。

(d) 施設の提供

大学の知的資源に加えて、地域団体等の実施する各種試験、講習会やスポーツ大会へ会場を提供し、地域の団体や市民との交流を深めている。県民スポーツレクリエーション大会、和歌山県サッカー選手権、実用英語検定、国家公務員採用試験などである。

(4) その他

地域社会に本学の持つ教育研究資源を広報する一環として、全学部で教員の研究者総覧を作成し、個々の教員の専門分野、最新の研究成果から教員へのアクセス方法など、個人情報発信している。さらに生涯学習教育研究センターの「土曜講座ニュース」を始めとして全ての研究センターで最新の情報や催事を案内しているほか、本学広報委員会編集の「アヴニール」を発刊している。この「アヴニール」は、本学が地域社会の一員として発信する地域広報誌の性格を有し、本学の特徴ある取り組みや学生の体験学習などを紹介しており、他に例をみない大学広報誌として高い評価を得ている。

評価結果

1. 目的及び目標を達成するための取組

和歌山大学においては、「教育サービス面における社会貢献」に関する取組として、科目等履修生の受入れ、研究生の受入れ、教育訓練給付制度による社会人のキャリアアップ事業、オープンキャンパス、学生自主研究プロジェクトコンクール、体験学習、公開講座、講習会、古文書・絵図・考古学的資料群の展示、出前授業、出前研修、図書館の館外カウンター開設、施設の提供などが行われている。

ここでは、これらの取組を「目的及び目標を達成するための取組」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

おもしろ科学まつりは、児童が興味を持つようなテーマ設定に工夫を凝らし、水・光・電気など身近なものに関するふしぎを科学の実験、観察、工作などを体験、見学することにより多感な年頃の児童に科学のおもしろさや楽しさなど様々な刺激を与え、学問に対する興味を増進させる機会を提供している特色ある取組である。

全学を挙げての学生自主研究プロジェクトコンクールは、テレビ和歌山及び県下の大学・高専・工業高校の教員など、地域の協力を得て、「自立型相撲ロボットの製作」などの現代的課題から「ソーラーラジコンカーの製作」などの環境関連課題まで、幅広く提出課題を設定しており、自主性・創造性に満ちあふれた人材養成に大きく貢献する特色ある取組である。この全学を挙げて取り組む学生自主研究プロジェクトを、自ら課題探求し、問題解決する能力の養成を目指した学内組織の学生自主創造科学センター設立にまで発展させたことは、実学を目指す大学の方針に沿っており、優れた取組である。

開かれた大学として、公開講座、出前授業、出前研修、体験学習など、地域と密着した多彩な取組が行われている。公開講座、講習会等は、和歌山市内だけでなく、紀北、紀南でも開催し、県下全域に等しく教育サービスを提供する努力が払われ、分野横断的に最新の研究成果や知的ニーズの高いテーマで開催している特色ある取組であるとともに、和歌山県の地域特性、過疎地、交通の不便な地域、高齢化の進む地域などを強く意識した事業推進努力がなされている点は、優れている。

また、土曜講座は、公的機関や企業から人材や資金の支援を得て、企画の段階から自治体・企業・NPOなどが参画しており、地域報道機関と連携し県下にラジオ放送されるなど、地域と連携した特色ある取組である。

生涯スポーツ講座において、「中高齢者のための体力アップ大作戦」、「中高年のための理想的な肥満解消法を教えます」など、市民の学習・研究ニーズの高い高齢者向けのテーマ設定がされているように、和歌山大学が、教育サービス面での社会貢献を生涯学習機会の提供と捉え、幼児から高齢者まで、各年齢層のニーズに応じた教育機会を提供している点は優れている。

県立医科大学及び私立高野山大学との三大学共同公開講座は、三大学の特性、特色を生かし、和歌山大学の自然科学・社会科学・人文科学に加えて、県立医科大学の医学や高野山大学の宗教の専門家が市民の学習・研究ニーズに応えて共同で開催する特色ある取組である。

紀州経済史文化史研究所の展示活動や、附属図書館における和歌山地域の文化遺産である「紀州藩文庫」の目録電子化などの和歌山地域の文化に関わるサービスの提供は、地域社会とのパートナーシップ形成という点で優れている。

附属図書館は、紀州藩文庫の目録電子化による地域文化の継承・発進や、夜間・土曜日の開館、夏季休業期間を利用しての中高生への図書館開放、和歌山市街地にある附属学校や生涯学習教育センターにおける館外カウンターの設置など、積極的に利用者のサービス向上に努めており、大学の持つ物的資源の地域への提供及び社会へ開かれた大学の実践という点で優れている。

教育訓練講座は、平成12年4月から厚生労働省の講座指定を受けたばかりということもあり、経済学部「実務商学コース」及びシステム工学部の「設計情報処理コース」ともに入学実績がなく、地方紙や報道機関などとの連携やホームページを活用した情報発信や広報活動を行うなど、改善の余地がある。

教育学部附属教育実践総合センターでは、教育臨床・学校教育相談研究プロジェクト等の中で、公開講座やセミナーを開催しており、和歌山県内の教育委員会担当者や現職教員の資質向上に向けて取り組んでいる点は、優れている。

和歌山地域コンソーシアム図書館は、大学附属図書館

の新しい情報サービスとして、地域に立地する大学図書館や県立図書館と連携し、地理的制約による教育サービスの偏りをなくし、自宅に居ながらにして大学の教育サービスを楽しむよう Web 上に設立された特色ある取組である。

取組等の学外者への周知については、和歌山大学地域広報誌の「アヴニール」やパンフレット、ホームページ、地域報道機関との連携などにより、多彩に行われている点は優れている。また、学内の教職員への周知については、大学改革説明会、教授会など、機会あるごとに理解を求めるとともに、取組の概要を大学ホームページやメールを活用して周知している点は優れている。

貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成に十分に貢献している。

2. 目的及び目標の達成状況

ここでは、「1. 目的及び目標を達成するための取組」の冒頭に掲げた取組の達成状況を評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成状況の程度を「達成の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

公開体験学習会は、平成 12 年度は 513 人が参加し、そのうち中学生が 85 人、高校生が 93 人と、理工系離れ問題のある世代も多数参加している。アンケート調査では、次世代・自然エネルギー体験学習セッションやニホンオオカミの剥製展示などに興味を示す意見や、機会があればまた参加したいとの意見などがあり、好評を得ている点は優れている。

公開講座は、各地で様々なテーマが開講されており、受講者数が募集定員を越える講座もあるが、募集定員 100 人に対して受講者 16 人と大幅に定員割れするものもあり、改善の余地がある。

土曜講座は、地方紙やラジオ放送を含め、広報活動を積極的に行っており、平成 12 年度は 12 回開催されているが、受講者が毎回 100 人を越え、取組が地域に定着している点は優れている。また、受講者に対するアンケート調査の結果では、7 割の受講者が満足したと回答しており、満足度は高い。

生涯スポーツ講座の平成 12 年度の受講者数は、1 回当たり 87 ～ 149 人であり、全 10 回中 7 回が募集定員 100 人を満たすか、あるいは越えるほど盛況である点は優れている。また、受講者に対するアンケート調査の結果では、約 75 %の受講者が満足したと回答しており、満足度は高い。

達成の状況（水準）

目的及び目標がおおむね達成されているが、改善の余地もある。

3. 改善のためのシステム

ここでは、当該大学の「教育サービス面における社会貢献」に関する改善に向けた取組を、「改善のためのシステム」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、システムの機能の程度を「機能の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

生涯学習教育研究センターでは、土曜講座において、毎回アンケート調査を実施して問題点を把握し、その結果については、問題点を指摘する意見とそれへの回答又は今後の対応策等も含めて受講者に公表している点は優れている。また、学生自主創造科学センターにおいても、活動ごとに毎回アンケート調査を実施するなどして問題点を把握し、継続的に改善に取り組んでいる点は優れている。

システム工学部では、ほぼ2年に1度の割合で定期的に外部評価を実施しており、指摘された点について改善につなげている点は優れている。しかし、改善の余地のある部局もある。

大学全体としては、和歌山大学自己点検・評価委員会を設置し、外部評価を平成10年度より5カ年計画で毎年度テーマを決めて、改善点の把握を目指して実施している点は優れている。また、外部評価後も、指摘された点の改善状況を『昨年の外部評価委員会における「提言と評価」に対するその後の取り組み』としてまとめ、その進捗状況を把握し、改善のために取り組んでいる点は優れている。

機能の状況（水準）

改善のためのシステムがおおむね機能しているが、改善の余地もある。

評価結果の概要

1. 目的及び目標を達成するための取組

特に優れた点及び改善点等

おもしろ科学まつりは、児童の学問に対する興味を増進させる機会を提供している特色ある取組である。

学生自主研究プロジェクトコンクールは、自主性・創造性に満ちあふれた人材養成に大きく貢献する特色ある取組である。

公開講座、講習会等は、県下全域を意識した事業推進努力がなされている点は、優れている。また、土曜講座は、地域と連携した特色ある取組である。

生涯スポーツ講座で高齢者向けのテーマが設定されているように、幼児から高齢者まで、各年齢層のニーズに応じた教育機会を提供している点は優れている。

三大学共同公開講座は、三大学の特性、特色を生かして開催する特色ある取組である。

紀州経済史文化史研究所の展示活動や、附属図書館における「紀州藩文庫」の目録電子化などは、地域社会とのパートナーシップ形成という点で優れている。

附属図書館は、積極的に利用者のサービス向上に努めており、優れている。

教育訓練講座は、入学実績がなく、改善の余地がある。

教育学部附属教育実践総合センターは、和歌山県内の教育委員会担当者や現職教員の資質向上に向けて取り組んでいる点は、優れている。

和歌山地域コンソーシアム図書館は、大学附属図書館の新しい情報サービスとして、特色ある取組である。

取組等の学外者への周知は多彩に行われ、また、学内の教職員へは、メールなどを活用して周知している点は優れている。

貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成に十分に貢献している。

2. 目的及び目標の達成状況

特に優れた点及び改善点等

公開体験学習会は、参加者も多く、好評を得ている点は優れている。

公開講座は、受講者数が募集定員を越えるものもあるが、大幅に定員割れするものもあり、改善の余地がある。

土曜講座は、地域に定着しており、満足度も高い。

生涯スポーツ講座は、受講者数も多く、満足度も高い。

達成の状況（水準）

目的及び目標がおおむね達成されているが、改善の余地もある。

3. 改善のためのシステム

特に優れた点及び改善点等

生涯学習教育研究センターや学生自主創造科学センターにおいて、実施する活動の問題点を把握し、継続的に改善に取り組んでいる点は優れている。

システム工学部では、定期的に外部評価を実施しており、優れているが、改善の余地のある部局もある。

大学全体としては、外部評価を平成10年度より5カ年計画で毎年度テーマを決めて実施している点は優れている。

機能の状況（水準）

改善のためのシステムがおおむね機能しているが、改善の余地もある。